20241117　朝礼拝　ルカによる福音書１章８〜13節

「一足早いクリスマス」

先に申し上げておきますと、「一足早いクリスマス」なんて説教題にしましたが、クリスマスはまだ先です。あと１ヵ月あります。逆に、今の状況で、もうクリスマスだよと言われると、ちょっと準備が大変です。アドベントクランツ、今日この後、青年会で作るところです。愛餐会の段取り、今日例会のあと、婦人会運営委員会で話し合います。いくら喜ばしいとは言え、いきなりクリスマスをお祝いすることはできません。じゃあ、なんで、「一足早いクリスマス」という題にしたのかと言いますと、イエス様御降誕という本当のクリスマスの前に、この世界がイエス様を迎え入れるための準備を促す人が生まれていました。この人の誕生は、ルカによる福音書においてクリスマスの先触れとして、切り離して考えることのできない重要な出来事とされています。しかし、アドベント期間の限られた礼拝回数の中で、また、幼稚園で行うページェント・降誕劇のシナリオにおいて、なかなか、この人のことに触れる機会がありません。おそらく、私が敦賀教会に赴任して、初めてこの人、洗礼者ヨハネの誕生物語について説教で触れているかと思います。とっても重要な人が誕生したお話。でも、何かと過ごされがち。なので、今回は、「一足早いクリスマス」と題して、洗礼者ヨハネさんの誕生にまつわるお話を見て行きたいと思います。

洗礼者ヨハネさんのお父さんは、ザカリアという人でした。非の打ち所がない敬虔な信仰者に留まらず、神様と人を繋ぐ祭司職を担う重要な立場の人でした。新約聖書において、この祭司職のトップである「祭司長」という役職者は、ファリサイ派や律法学者と並んで、頻繁に「古くて悪い信仰者の代表」として語られます。しかし、いつの時代も、民衆に最も近い現場で、粛々と自らの職務を行う人の中には、無垢で善良な者も多いと言えます。イエス様がお生まれになるこ

とに先んじて、人々に悔い改めを説くことを運命づけられた洗礼者ヨハネさんは、善良な祭司職であるザカリアさんのもとに生まれました。ちなみに、ザカリアさんの妻であるエリザベトさんは、イエス様の母であるマリアさんの親類であると、後に説明されます。ということは、洗礼者ヨハネさんと、御子イエス様は、親戚関係であったという事実も指摘できるわけです。イエス様が成人された後に、洗礼者ヨハネさんから、洗礼を受けるという場面が、もうちょっと先に書かれています。そこだけを読むと、イエス様と洗礼者ヨハネさんは、初対面であるかのような状況説明がなされています。でも、実は、両者の母親であるマリアさんと、エリザベトさんは、どちらも主の御業によって身籠った、親しい親戚同士だったということです。

洗礼者ヨハネさんの誕生が予告される、この一連のお話の中で、本当のクリスマスと同様の出来事も報告されています。それは、天使出現に対する驚きと恐怖ということです。イエス様がお生まれになる時、ベツレヘム近郊で働いていた羊飼い達に、主の天使が現れました。職業的な理由から、礼拝経験の浅かった羊飼い達です。とは言え、旧約聖書の教えを知り、祈り賛美する習慣を持っていた彼らが、主の天使に出会ったなら、その選ばれし者が得られる類稀な奇跡に、さぞ讃え喜んだのだろうと思いきや、「非常に恐れた」と報告されています。モーセが海を割ったとか、神様が天の軍隊を連れて現れたとか、預言者たちによって数多くの神様の御言葉が与えられたとか、そういう旧約聖書の知識を当たり前のように持っていた人たちも、いざ本当に天使に出会ったなら、やっぱりビックリして賛美ではなく、恐怖を感じるものなのだと思わされます。存外、現代を生きる私たちと変わらない信仰理解と言いますか、感受性と言いますか、「天使が現れる？　いや、そんなことあるわけないじゃん」という、わりと現実的な理性を持っていたんだなと思います。そして、今日のお話です。非の打ち所がない信仰者、無垢で善良な祭司職、しかも、その出来事の舞台は、何もない荒れ野ではなく、主の聖所と呼ばれる、当時、どこよりも神

様に近い場所でした。香を焚いて聖所の清らかさを高め、外では大勢の信仰者が祈りを合わせている。そのような極めて「聖なる場所」「聖なる時間」に、主の天使が現れた。ある意味、起こるべくして起こったと言えるような、絶妙なタイミングでの奇跡です。しかし、その絶妙な奇跡に出くわしたザカリアさんも、やっぱり、「不安になり、恐怖の念に襲われた」と言うんですね。この奇跡を理解して、受け止めて、静かに恭しく「どうぞ主よ、お話しください」とはならなかった。・・・また、ちょっと話は逸れますが、そういう天使との突然の出会いにおける狼狽えとか不安感という点から言いますと、「おめでとう、恵まれた方、主があなたと共におられる」と、突然に挨拶されて、「いったいこの挨拶は何の事だろうと考え込んだ」とされる母マリアさんは、非常に肝の据わった格好良い女性であるとも言えます。マリアさんこそ「不安になり、恐怖の念に襲われた」となっても仕方ないって思うんですけどね。強靭な精神力と理解力の持ち主であると言えます。そういうマリアさんの人格や資質や信仰心が、イエス様の母親として選ばれた理由なのかも知れません。

私たちには、マリアさんのような強さはありません。いくら信仰的経験や修練を積んでも、ザカリアさんのように、いざって時には、不安になり、恐怖を感じてしまうでしょう。だから、この祭司ザカリアさんの姿と言うのは、信仰者である私たちの写し鏡であるとも言えます。いくら信仰を強く持っても、宗教制度や評価の枠組みの中で、いくら経歴を重ねても、特別な立場になっても、結局、大きな主の御業に触れたなら、喜びではなく不安を憶え、賛美ではなく恐怖するという。それは「我こそはクリスチャンなり」と誇ってしまいそうな時に、私たちに謙虚さを教える、一つの良き前例であると言えます。

私たちは、これからクリスマスに向けて準備を進めていきます。嬉しいクリスマスです。教会にとって最も大切な祝祭日の一つです。しかし、その先触れとなる洗礼者ヨハネさんの誕生を前

にして、不安と恐怖を味わった敬虔な信仰者、祭司ザカリアさんがいました。この聖書の報告は忘れないでいたいと思います。しかも、今日は長くなるので触れませんでしたが、このザカリアさんは、念願の子どもを授かるという、主の天使の嬉しい知らせに、素直に頷くことはできませんでした。「何によって、わたしはそれを知ることができるでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」と、現実的な問題を提起し、主の天使に聞き返します。真の信仰者なら、そこで「アーメン」と言うべきでしょう。でも、そんな立派な信仰者の姿は、祭司にさえ見出せず、聖書のどこを探しても見つかりません。だから、私たちが、あともう 1 回残している降誕前の聖日と、12 月から始まる待降節の日々の中で、不安を憶えたり、喜びとは正反対の感情を味わったりしても、それは仕方のないことでしょう。むしろ、その揺れ動く感情を謙虚に受け止めた上で、信仰の強い、弱い、信仰のある、なしに関わらない、広く開かれたクリスマスの恵みを心に留めていたいと思います。

主なる神様は、ただ御心のままに、天使を送り、奇跡を起こし、驚きと喜びを示されます。その時期や、対象や、範囲や、深さは誰にも分かりません。聖なる場所と、俗なる場所で、ともに祝われるクリスマスにあって、いつ、だれに、どんな神様のプレゼントが与えられるのか。私たちは開かれた心をもって、柔和に感謝する準備を整えながら、クリスマスまでの日々を過ごして参りたいと願うものであります。お祈りを致します。

神様。私たちは一足早くクリスマスの恵みに触れる信仰の日々を過ごしています。あなたの恵みは、私たちの予想を超えて大きく、早く、意表を突いてくるものです。そのような御心の妙を弁え、クリスマスまでの残り 1 ヵ月を、気負わず、あなたに委ねて、喜びの芽生えを探しつつ、過ごすことができますように。私たちの日々の歩みを導いてください。このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。